

ぺんぺん丸の逆襲

1月の中旬ともなれば、冬型の気圧配置が強まり、1年中気候温暖な熱海といえども、結構寒い日が続く。慶介は、久々の休みに金ちゃんを釣りに誘ったものの、ボートが海に出せるものか少々気がかりだった。

朝の9時、待ち合わせ場所のファミリーマートの駐車場に5分前に車で乗り付けた慶介は、海の様子を眺めながら、伊東からやってくる金ちゃんこと金田隆を待つ。海からの東寄りの風が海面に白波をもたらし、少しばかりのうねりも手伝って時化模様ではあるが、大物を狙わず、多賀の湾内にボートを留めた5目釣りに徹するならば、ボートは何か出せるだろうと慶介はたかをくくっていた。物置から久々に引っ張り出して車に積んだヤマハの2馬力の船外機が機嫌よく動いてくれればいいのだがと少し気がかりではあったけれど・・・

待ち合わせの時間から5分遅れて、サングラスをかけてシマノのマークの入ったキヤップをかぶった金ちゃんがやって来る。冬でも色黒なのは、趣味のサーフィンを四十近くなってもやめないからなのだろうか。慶介と金ちゃんとは、会社の人事異動で部署が隣接したことがきっかけで最近知り合ったのだが、よくよく話してみると、出身校が伊東の同じ高校で、2年違いであったことがわかり、在校中には、面識はなかったものの、会社の飲み会で、高校当時の名物教師の話題で盛り上がりたりして、気心の知れる仲となった。また、お互いの共通の趣味が釣りであることも手伝い、プライベートでも遊ぶ機会がこのところ増えている。40歳の慶介ともうすぐ38歳になる金ちゃんも、早くして結婚したこともあり、子供の親離れ化が進み、もう一度自分の人生にささやかな楽しみを探そうとしていた時期でもあった。

「おはよう。なかなか決まってるね、そのサングラス」
慶介は四駆の車から降りてくる金ちゃんに声をかける。

「慶介さん、お待たせしました。」

「早くしないと魚が逃げてしまうよ。」

「魚釣りで9時集合は無いでしょう。せめて6時ぐらいには船を出さないかね。9時も9時5分も大きな違いは無いですよ。」

確かに金ちゃんの言うとおりかも知れないが、慶介は、釣り師の割には、早起きが最大の苦手。その上寒がりとくれば、1月の早起きは、できれば返上したい。慶介は、話題を変えて、金ちゃんにこれから行動を促すことにする。
「まあ、コンビニで食料を買い込んで、隣の釣具屋で釣り餌を仕込むことにしようよ。」

二人は、コンビニでおにぎりや飲料のペットボトルを買い込み、隣の釣具屋のオヤジから最近の釣果情報を仕入れながら、オキアミとジャリメを調達した。どうやらアジや鯛がボツボツ釣れているらしいが、運がよければ大ヒラメにお目にかかれるかも知れない。「結構波が出てくるから、船を出すのなら気をつけた方がいいよ。」というオヤジの忠告は、大ヒラメという言葉の前にかき消され、慶介と金ちゃん頭の中は、大ヒラメを吊り上げたシーンの妄想で一気にちきれそうになっていた。二人ははやる心を抑えて、慶介の子供時代の同級生が経営する貸しボート屋に預けてあるマイボートを波打ち際まで引きずり出した。ヤマハの2馬力の小さなエンジンをボートの船尾に取り付けて、波打ち際に押し出す時に、慶介は、忘れ物に気がついた。

「いけねえー、ゴム長履いてくるの忘れてた。俺が先に船に乗るから、金ちゃんは、後から船を波の先に押し出してから、船に乗ってくんねーかなー。」

「まいったなー。船首から乗るとなると結構濡れちゃうかも。」確かに、船の操縦をするのは慶介となると、普通なら船首に金ちゃんや先に乗り込み、慶介が船を押しながら後から船尾に乗り込み、船外機のエンジンをかけて操縦するという段取りになるはずだが、ズック靴を冬の海で濡らしてしまうと、釣りの最中につま先から冷えてくるのは目に見えている。できることなら慶介としては、楽な道を選びたかった。

「金ちゃんは、つなぎのゴムズボン履いてるじゃん。船の上では、キヤプテンの指示に従うのがルールってもんだよ。」

慶介は、小型船舶の免許を持っている。小さいながらこのボートも船外機も慶介所有のモノともなれば、クルーの立場の金ちゃんは、慶介の指示従うしかないのだ。

「しようがないなー、わかりましたよ。じゃー慶介さん、先に乗って下さい。僕が後から乗りますから。」

「悪いなー。前から乗るときには、水が入らない様に気をつけてね。」

砂浜に打ち寄せる波間から、タイミングを計って船を出したものの、かぶった波と金ちゃんが船首から船に飛び乗る時のタイミングで、結構な量の海水が船に入ってしまったが、まあ、何とか波打ち際の沖に船を繰り出すことに成功して、二人はやれやれと思う。慶介は、エンジンをかける為、セルロープを何度も引っ張るが、年季の入ったヤマハの2馬力は、なかなか起動してくれない。そうこうしているうちに、ボートは波打ち際に押し戻され、またもや、波をかぶって海水が入って来た。「慶介さん、大丈夫ですか。」

オールを漕ぎながら、舟を沖に出そうとする金ちゃんが心配そうな視線を慶介に向ける。

「大丈夫さ、何とかなるよ。エンジンが蔵で休んでいた時期が長かったんで、目覚めるのに時間がかかっているだけさ。」

一抹の不安が脳裏をよぎったが、慶介は、ひたすらセルロープを引き続ける。何度もチャレンジしているうちによりやく、エンジンが掛かった。

「一旦起動すればこっちのもんさ。だいぶ手こずったけど、もう大丈夫さ。さあ出発出航。」

慶介は、心配そうな金ちゃんを安心させるために、笑顔で答えた。

「船にだいぶ水が入っているけど、ほんとうに大丈夫ですか。」

金ちゃんの不安げな様子をよそに、慶介はエンジンをフルスロットにしてボートを沖に向ける。

「今日のところは、湾内から沖に出ることはしないから、安心してね。」

数分進んだ所で、オレンジ色のブイが浮いているのを発見した慶介は、このあたりで釣り糸を垂れてみることにした。金ちゃんを安心させる為に、エンジンをスローにして風下から、左舷をオレンジのブイに接近させた。

「金ちゃん、その左手前方のブイに、船首のもやいロープを結んでくれないかな。」

慶介は、金ちゃんに船をもやいで固定することをお願いする。金ちゃんは、慣れない手つきながら、オレンジのブイに船首のロープを結ぶことに成功した。二人は、思い思いの仕掛けを準備して、竿先から釣り糸を垂れたが、波風は収まる様子も無く、時たま襲うねりが、少しずつ海水を船中に呼び込んでいた。

慶介の目論見は、まずジャリメを餌にして、小魚を吊り上げてから、それを生餌にして、大ヒラメをしとめるというものであった。一方の金ちゃんは、スピニングリールで大き目のジグを投げて、海底の探りを入れて、一気に大ヒラメを仕留めるといふ作戦を取った。

各々の妄想は、それぞれの頭の中で増殖して、至福のアドレナリンを充満させる。慶介は、釣りとは、九十パーセントの妄想と十パーセントの釣果で成り立っているものといつも考えている。たとえ貧しい釣果に終わろうとも、結果が出る瞬間までは、思いもよらない大物との格闘をいつも夢見ている自分がいる。そこにおろかな夢とロマンがあるから、海釣りはやめられない。学生時代にヘミングウェイの「老人と海」を読んで、痛く感動した慶介は、いつかカジキマグロを仕留めてやるとの野望を抱いて、船の免許を取り、小さいながらもボートを手に入れている。休みの度に海に繰り出していた若いころを懐かしく思い出していた。このボートもよく見るとあちこち

に傷みが進み、ずいぶんとくたびれて来たものだ。慶介は思う。どこか、自分の人生にも似たところを感じて、愛着があるので、なかなか手放す気にはなれない。

そうこうしているうちに慶介の竿に小さなあたりがあった。糸を巻き上げてみると、はぜっこが掛かっていた。

「なんだ、はぜっこか。でも生餌に使えるかも知れないのでキープしておくことにするかな。」

慶介は、吊り上げたはずっこを船の中に投げ入れた。
「ずいぶん、水かさが増したようですが、大丈夫ですかね。」

金ちゃんは、不安げな様子で尋ねてくる。

「大丈夫さ。くるぶしあたりの水は、どうってこと無いさ。生餌を泳がすいけす代わりにちようどいいさ。」

慶介は、余裕を持って金ちゃんに答える。

しかしながら、波風が衰える気配は一向に無く、ひたひたと海水が波と共に船内に入り込んでいたことには、変わりなかった。

思わぬアクシデントは、予想もしないタイミングで人生に襲いかかるものだ。二人にとっての至福の時は、悪夢のときに反転する。何度かの波が、船首から船にかかって来たなと思いきや、船の中の水は一気に増水し、くるぶしから向う脛の辺りまで水かさが増してきた。

「金ちゃん、ちよつとやばいみたいだね。船首のもやいを解いてくんねえーかな。」

と慶介が金ちゃんに声をかけて、それに応ずるように、金ちゃんがオレンジのブイにもやっていたロープに手を掛けた瞬間、船首から海水が入り込み、船の中は、たちまちバスタブの様な状態になってしまった。二人の体重が重みとなり、一旦海水が入り出すと、後戻りできないまま、小さなボートは、たちまち、海と同じ水位になつてしまった。船の中の二人はバランスを崩し、船から海へ投げ出されてしまった。

慶介は、これは夢に違いないと思った。真冬の海水は思いのほかぬるくて、寒さはまったく感じなかった。おそらく、金ちゃんも同様の感じを持っていたに違いない。慶介は、冷静に立ち泳ぎをしながら、次に何をすべきかを考えながら、金ちゃんに声をかける。

「やれやれ、参ったな。金ちゃん大丈夫かい？」
「俺は大丈夫ですよ。」と金ちゃんは、力なく答える。

慶介は、この船で夏場に転覆したことは一度ならずあったが、真冬のこととなると初めての経験であった。金ちゃんのことだが、かりで仕方ない。金ちゃんそんなに大丈夫じゃなさそう。まずは、自分が落ち着くことだ。

「とところで金ちゃん、泳げるよね。」

慶介は、念を押すように恐る恐る金ちゃんに聞いてみる。

「大丈夫ですよ。前にも言いましたよね。俺はこう見えても元サーファーですからね。」

「元サーファーでも、泳げないサーファーや陸サーファーってのもいるみたいだからさ。」

「どうやら泳げる様子を見届けて、慶介は一安心した。船の中のもの、あらかじめ海に投げ出されたので、失った竿やリールの損失を思うとめまいがするが、まあ、今は、そんなことより、いかにこの難局を乗り越えて、陸に上がるかが先決だ。気がつくつと、慶介は、左手に、赤い燃料タンクを持ち、右手には、タックルボックスを握っていた。道具は、また、買えば手に入れることができる。それよりは、早く岸に泳ぎつかなければと思いつながらも、両手でつかんでいるものをなかなか手放せないでいた。

金ちゃんは、立ち泳ぎのまま、浮き代わりにクーラーボックスを抱えているから、何とか大丈夫だろう。慶介は、もう一度、金ちゃんに声を掛けて確かめてみる。

「金ちゃん、心配要らないから、落ち着いて泳いで帰ろうぜ。砂浜は、少し遠いから、左手の埋立地のテトラに上陸しよう。」

「わかった。慶介さんも、落ち着いて下さいよ。燃料缶や道具箱持っている場合じゃないでしょう。」

慶介は、金ちゃんの言うとおり、確かに泳ぐには不要な長物で両手を塞いでいた自分に気がつき、こんな時までも強欲な自分を恥じた。慶介は、両手の燃料缶と道具箱を泣く泣く手放し、手放したモノの金額を見積もりながら、かえるの様な背泳ぎで左手のテトラを指した。少し経過して、金ちゃんの行方を探った慶介は、金ちゃんが砂浜に向かっていることに気がついて声をかける。

「おい。金ちゃん、大丈夫かい。そっちは遠いよ。こっちに来いよ。」

金ちゃんは、力ない声で答える。

「大丈夫ですよ。ズボンに水が入って足がいうことをききません。俺は、クーラーにつかまって砂浜に上がりますよ。心配しないで下さい。」

慶介は思う。そうか、金ちゃんはずなぎの長いゴムズボンを履いていたんだっけ。あれじゃ思う方向には泳げまい。幸い、風の向きは海から岸に向かっているから、おそらく大丈夫だろう。でも時間がかかって、その間に体温を奪われてしまったらどうしよう。冬山の遭難者やタイタニックのデカプリオのイメージと金ちゃんの姿が脳裏で重なって、慶介はとても心配になった。自分も、泳ぎ直して、金ちゃんと共に砂浜にワンツーゴールを目指すべきか、迷いが生じた。

その時だった。砂浜沿いの国道が、なにやらにぎやかになってい
るのが、慶介の目に飛び込んできた。どうやら、こんな日に海岸沿
いで火事でもあったらしい。大きなはしご消防車が海岸に止まった。
救急車やパトカーも駆けつけていることを見ると、怪我人も出てい
るのかもしれない。ところが、どこにも火の手は上がっておらず、煙
すら見あたらない。

慶介は、金ちゃんに目をやると、金ちゃんは、海岸に集まった観
光客に丸見えの状態で、沖合いを漂っていた。どうやら、通りがか
りの観光客が、遭難事故と思ひ、110番通報したらしい。やれや
れ、厄介なことになってしまった。慶介は、この先の事を思うと一
気に憂鬱になってしまった。まずは、自分が一刻も早くテトラに上
陸して、これが、単なる寒中水泳に毛の生えた出来事であることを
説明せねばなるまい。慶介は、力強くカエル泳ぎから背泳ぎに切り
替えて、埋め立て地のテトラに上陸した。そのとたん、風に体温を
奪われて、全身の震えが止まらなくなった。真冬の寒中水泳は、人
をハードボイルドに変える。そこには、パトカーから降りてきた警
察官が待ち構えていて、話しかけて来た。

「大丈夫ですか。お怪我はありませんか。」と若い警察官が尋ねる。
「大丈夫です。ボートに水が入ってしまっただけです。大した
ことありません。」

全身の震えをこらえながら、慶介は引きつった笑顔で答える。
救急隊員から毛布を掛けてもらい、慶介は、なんとか寒さをしのぐ
ことができて、ほっとした思いとありがたい思いで一杯になった。
金ちゃんのことを心配になった慶介は、砂浜の方に歩きながら、
海上にぷかりぷかりと漂う金ちゃんに目を向ける。気がつくのと、砂
浜には、オレンジのつなぎを着たレスキューとおぼしき消防隊員が
一列横隊となり、足を半歩開いて、海の一点を見つめている。海に
入って救助に向かう気配は見受けられない。レスキューの隊長から
は指示が出ないのは、隊員を冬の海に入らせることを躊躇している
のか、時間の問題で、金ちゃんが自力で上陸できるとふんだからな
のかは、ここからはわからない。砂浜に集まって来た観光客の集団
からは、一もう少しだ、がんばれよーとか熱い声援が飛び交って
いる。金ちゃんは、いつの間にか、多摩川に出没したゴマアザラシ
のように注目されて、なんだか映画のロケ地のような錯覚を受けて
しまう。

砂浜で待ち構える警察官と救急車の救急隊員に出迎えられるよう
に、金ちゃんがクーラーボックスを抱えて上陸してきた。慶介の唯
一の救助された財産を大事に抱えて、海水でパンパンに膨らんだズ
ボン姿の金ちゃんがこちらに歩いてくる。救急隊員が、マラソンゴ
ールのランナーの様に、金ちゃんの肩に毛布を掛けてくれた。何を

思ったか、金ちゃんは、帽子の上に掛けていたサングラスをきちんと目にかけて、肩で風を切つて慶介に向かう。慶介には、金ちゃんがまるで映画スターのように見えた。これだけ世間を騒がせておいて、そこまで、カツコつけること無いのにと慶介は思うが、何はともあれ、二人が無事に再会できたことが、ありがたくて、どちらからとも無く、相手を抱擁で迎えた。慶介は、タイタニックのデカプリオにならなかつた金ちゃんの体を抱きしめて、ほっとした。

「無事でよかつたですね。」と金ちゃんが声を掛けてきた。
金ちゃんは、無事とはいえぬ周りの事態を把握できていないよううで、慶介は、隣の警察官と救急隊員に視線を送つて、金ちゃんに合図した。観光客の一行からは拍手が巻き起こり、冬の海で生じたアクシデントは、砂浜のドラマに変わり、このまま静かに幕を落としてほしかった。

まずは、観光客が立ち去り、大げさなはしご消防車から降りてきたオレンジのレスキュー隊は、隊長の命令で出番の無かつたはしごを撤収して消防署に帰つて行つた。救急車から降りてきた救急隊長は、慶介と金ちゃんに、病院への搬送を尋ねるが、間髪をいれずに、金ちゃんが「大丈夫ですから結構です。」と答えるのを聞くと、「被害者搬送拒否！」と大きな声で報告し、「バインダーに留められた救急日誌に「被害者搬送拒否」と記載して、撤収して行つた。」とお騒がせして、すいませんでした。」と慶介は、救急隊にお礼を言つて、寒さをしのぐための古毛布を2枚をそのままいただくことにする。

最後まで残つた警察官は、慶介と金ちゃんの事情聴取を別々に始めた。慶介は、早く解放されるためには、質問にはすべて回答して、すんなり終わつたが、金ちゃんには、手こずつていた。

「職業は何ですか。」
「会社員です。」

「どちらの会社にお勤めですか。」

「個人情報保護法で保護されていますから、お答えできかねます。」
レスキュー隊まで出動させる事件を起こしておきながら「個人情報保護法」を持ち出す場合ではないだろうと慶介は隣でくすりと笑つてしまつたが、こういうところが金ちゃんの愛すべきところなのだ。警察官も時間の無駄と判断したのか、慶介の調書で、金ちゃんの名前はわかつているためか、それ以上の追求は無かつた。慶介と金ちゃんは、やれやれこれでようやく開放されたかと思いきや最後に大変なしっぺ返しがやって来る。

「ところで、今回の事故は、海の上の事故となりますので、所轄が下田海上保安部となります。すでに当方より下田海上保安部には通報しておりますので、三十分以内に当地に到着となりますので、こ

こでしばらくお待ち下さい。」

若い警察官は、淡々と説明するとその場を立ち去ろうとした。「そんな大げさなことしないで下さいよ。ずぶ濡れのままで、真冬の海岸にあと三十分も待ってなくちゃいけないんですか？ 勘弁して下さいよ。」

慶介は、精一杯警察官に抗議するが、聞き入れてはもらえない。「申し訳無いですが、上からの指示ですので、寒いでしょうが、もうしばらくお待ち下さいね。」

警察官は、ずぶ濡れの二人を見捨ててパトカーで帰ってしまった。

「だから言ったことはない。もうちよっと金ちゃんがぺこぺこ謝つとけば、丸く収まったかも知れないのに・・・」

慶介は、金ちゃんに一言言ってみるが、内心では、おそらくどう転んでもこうなることは避けられなかったものと観念する。

「それよりか、下田海上保安部とか言ってたけど、三十分でどうやって下田から熱海まで来れるのかなー」

金ちゃんが不吉なことを聞いてくる。

「そりゃー、おそらく、下田から三十分だから、高速巡視船かヘリコプターだろうが・・・」

冗談のように慶介は金ちゃんに言ってみる。

「馬鹿いうなよ、テレビの見すぎだよ。俺たちは海で遭難して救助を待っているわけじゃーないんだから、そんな大げさなことに税金使うわけないだろ。警察官にどうやってここまで下田海上保安部とやらが来るのか聞いておけばよかったよな。」

二人とももうこれ以上大げさにせずに、そっとしておいてもらいたいという気持ちで一杯だった。早く家に帰ってずぶ濡れの衣服を着替えたり、海の上でスクリューを空に向けて漂っている哀れなボートをどうやって回収するかなど、二人にはやらなくてはならないことが、まだたくさんあるのだ。二人は、冬の海岸の風に吹かれながら、奪われた体温から震えが止まらなくなり、二人の口数もめつきり少なくなっていく。二人はうつろな目を海に向けたり、空を見上げたりして、どうやって来るかもわからない「下田海上保安部」の到来を待ちわびていた。

警察官の言うとおり、ちょうど警察官が立ち去ってから三十分するとライトバンが、二人の前に横付けとなり、下田海上保安部海浜事故対策係長の木下氏が、部下を連れて到着した。名刺を手渡ししながら、

「大変お待たせしました。寒い中大変でしたね。少しだけお話を聞かせて下さい。」と口を開いた。

慶介と金ちゃんの二人は思いのほか、腰の低い海上保安部の職員

の対応にほっとした。

「慶介は、木下氏にお願いを申し出ることにした。
「すいません。私たちは、着ているものが濡れなんです。自宅が車で五分のところにありますので、着替えに帰らせてもらっていいですか。十五分で戻ってきますから。」

厄介な調書をとられるとなると、こちらも体制を整えなくてはならないと考えた慶介は、ダメもとで木村氏にお願いしてみる。

「そういう事情なら結構です。こちらでお待ちしておりますので、手早く着替えて来て下さい。」

慶介と金ちゃんは、木下氏にお礼を言って、自宅まで着替えにひとまず帰ることにした。自宅に着いた慶介は、自分の下着からズボンや上着までの一式を金ちゃんに貸してあげ、自分もようやく冷たい衣服から開放されて、ほっとした。そして、小型船舶の免許を引き出しから取り出して、ズボンのポケットに突っ込んだ。

「これこれ、これが無いと、免許不携帯になるところだったよね。」
慶介は金ちゃんに目配せして、説明した。

「法律違反は無いし、これで、大丈夫ということですか。」
不安げな金ちゃんは、慶介に問いかけてくる。

「船舶検査は、更新していないけど、船は海の上だし、そんなところまで突っ込みは無いだろうよ。」

慶介は、金ちゃんを安心させる為にも、たかをくくった答え方をした。

二人は、乾いた衣類の暖かさに感謝して、あまり乗り気ではないが、木下事故対策係長の待つ海岸へと戻って行った。

下田海上保安部の二人は、アイドリリングして暖房を利かせたライトバンの中に慶介と金ちゃんの二人を招き入れて、事情聴取が始まった。警察官の時と同様に氏名・住所・年齢・職業を一通り尋ねられたが、さすがの金ちゃんも今回は、すらすらと答えていた。

海難事故対策係長は、いよいよ、事故の核心に迫ってくる。ここからは、慶介と木下氏のぎりぎりでの質疑応答が始まる。

「ところで、なぜ船が沈水したのかを教えてください。」

「二人で釣りに夢中になっていて、海水が入って来たことに気づかなかったのです。」

「普通に考えたら、急に水が入ってくることは考えにくいですよね。」

「少しは、水かさが増していることは、気づいていました。まさか、転覆するまでになるとは思いませんでした。ご迷惑をおかけして申し訳ございませんでした。」

「船の中の水かさが増した段階で、引き返そうとか、バケツで水をくみ出そうとかは、考えなかったのですか？」

「あいにく小さなビニールのバケツしか持ち合わせていなかったの
で、船底の平らなボートから海水をくみ上げるのには無理がありま
した。そして、これはいけないと思つて、ブイのロープを解こうと
した時には、一気に海水が船内に流れ込んで、対応のしようがあり
ませんでした。」

「ところで、あの船は、動力船でしたよね。船の操縦免許はお持ち
ですか。」

慶介は、自宅から小型船舶の免許証を持つてきた甲斐があつたと、
一安心して、ポケットからそれを持ち出して、木下氏に手渡しなが
ら、金ちやんと目配せした。

「確かに有効な免許証です。申し分ありません。それでは、あの船
の船名を教えて下さい。」

「ペンペン丸といひます。」

木下海浜事故対策係長の視線が、鋭くなつてきた。慶介は、何
かまずいことを言つてしまつたかとたじろいだが、その原因がよく
わからなかつた。

「ペンペン丸まるですか。そんな名前の船は、これまで、聞いたこと
ありませんね。正直に登録していないとか、答えて下さいよ。」

温和な木下氏が、結構怖い人に見えてきた。こうなつたら、一か
八かバトルするしかないかと慶介は心に決める。

「ですから、間違えなくペンペン丸といひます。なんだったら過去
の船舶検査証の履歴を調べて下さつても宜しいですよ。第一、船の
名称が別に何だつていひじゃないですか。」

「これは、当方にとつては、重要なことなのです。海浜事故調書に
は、必ず事故を起こした船舶の名称を記入しないと報告書にならな
いのですよ。わかりました。それではペンペン丸とは、漢字でどう
書くのか言つて下さい。」

「ペンペン丸のペンペンはひらがなでペンペんと書きます。丸は、
牛若丸の丸です。」

慶介の隣でやり取りを聞いていた金ちゃんは、笑いをこらえよう
として、顔が引きつっているのが、なんとなく見て取れる。木下氏
の付き添いの担当官も金ちゃん同様のようだが、じつと助手席に座
っているだけなので、バックミラーからは表情はうかがい知れない。

「それでは、名称は、とりあえずペンペン丸といひことにしておき
ますが、そのペンペン丸とやら船舶検査証をお持ちですか？」

自動車の車検同様、船にも船舶検査制度というものがあつて、海上
での安全な運行を図るために、法定備品であるライフジャケットや
消火用のバケツ等が機能するかを確かめるべく、3年毎に法定検査
を受けることが義務付けられているのだ。慶介は、自分の上に最後
の審判が下つたようなダメージを受けた。

「すいません。だいぶ前から船舶検査の更新は怠ってました。最近、あまり乗る機会も無い船だったので・・・」

「それは、いけませんね。船舶検査が必要であることを知っていて、あなたは実施していませんでした。」

これにはさすがの慶介も参ってしまつた。法律違反を犯した上で、海難事故が発生した場合の罪は、陸上以上に重く、罰金の金額も相当な額になると、誰かに聞いたことがある。何か、助かる手は無いか。しばらくの沈黙の後で、この間、この船を貸してあげた山田から聞いた話を思い出した。これに賭けるしかないのだ。

「最近の法改正があり、小型船舶の操縦と船舶検査の規制が緩和されたと聞きましたので、ペンペン丸の場合は、船舶検査の対象外になつたはずです。」

「それは、どこで聞きましたか。また、その基準は、どこまでの範囲の船の場合ですか。」

慶介は、木下氏の反応を読み取り、もしかしたらこれは、ありうる話なのかも知れないと思つた。

「パソコンのホームページで確認しました。うーん、確か2馬力未満の船外機を積んだ場合は、船舶検査がいらないと聞きました。」

「確かに2馬力未満の場合は、もうひとつの条件を同時にクリアした場合に、船検の必要はありませんが、あなたの船の場合は、それはクリアしていません。」

慶介は、これはなかなかの手ごたえだと確信を持つが、もうひとつの条件が定かでない。なんだろうか。船の長さ？これは、相手に聞くようでは、こちらの負けだ。自分自身が、確信を持つて、法律の内容を認識した上で、だから船舶検査は受けていなくていいのです。と木下氏の前で断定的な発言をしなくては、助からないのだ。しばしの沈黙の後で、思い切つて慶介は、木下氏に回答をぶつてみる。

「小型船舶にあつて2馬力未満の動力船で、かつ、船の全長が3メートル未満の場合は、操縦免許も船舶検査も必要ないはず。」

威風堂々と木下氏に言い放つ慶介を金ちゃんは見つめながら、ウインクを送る。

木下氏と慶介の体制がここからは、互角に戻る。

「うーん、確かに、あなたのおっしゃる通りかも知れません。けれども、あの沖合いに浮かぶあなたの船は、ここから見る限りは、3メートル未満には見えませんがね。調書を完了するためには、あの船を実測する必要があるのですが。」

木下氏は、ここまで来たからには、何が何でも法律違反で慶介をしよつ引くという使命感に燃えているように、慶介には見て取れた。

「今日のところは、色々あつて疲れていますので、次の休みに、あのボートを海上からの回収をさせていただくということで、いかがでしょうか。」

慶介は、ペンペン丸の船の長さを実測されるのは、あまり得策では無いと思つて、木下氏との事情聴取の幕引きを急いだ。

木下氏は、まだまだ、食い下がってくる。温和な言葉遣いとは裏腹に、なかなかの強敵に違いあるまいと、慶介は思つた。

「ちなみに、どうやってあの海上のボートを引き上げるつもりですか。」

「熱海マリーナで購入したボートですから、後ほど、そちらに相談してみますよ。どうぞご心配なく。」

「それなら話が早い、私もあのマリーナのオーナーは良く存じ上げています。今からそちらに向かつて相談してみましよう。」

「ずいぶん熱心な海浜事故対策係長だと慶介は、思つた。なんとしなくても、ペンペン丸の船長を実測して、法律違反を摘発するつもりだ。」

「いいでしょう。それでは、お互いの車で、マリーナに行つて見ましようか。」

4人は、二組に分かれて、マリーナの事務所に向かうことになつた。

金ちゃんは、気が気ではないらしく、

「慶介さん、大丈夫ですかね。あの船の長さ測つたことありますか？」

と心配げに聞いてくる。

「大丈夫。なるようにしかならないさ。たぶん二人がやつと乗れるぐらいだから3メートルには欠けると思うけどな。まあ、なるようにしかならないよ。」

マリーナの駐車場に到着した二台の車から降りた四人は、事務所のドアを開けて、中に入つて行つた。大物芸能人のお兄さんだという社長の木村さんが出迎えてくれる。

「やあ、木下さんじゃないですか。久しぶりですね。何かありましたか。」

「実はお願いがありましたね。こちらの方がボートを転覆されて、船が湾の沖合いに浮いているんですが、引っ張つて来てもらえないかと思ひましてね。」

「それくらいのこと、お安い御用です。早速、うちの若い者にひつぱらせますよ。」

慶介は、久しぶりにあつた木村さんに挨拶して、お礼を言う。

「お手数をおかけします。ご迷惑をおかけして申し訳ございませんね。」

「海の上の事故は、お互い様といひます。みんなで助け合つていく

「ものですかね。」

「これで、話はうまくまとまり、棧橋に停泊していた小型のプレジャーボートが、現場に向かい、十分も立たないうちに、中身の空になったペンペン丸がプレジャーボートに引かれて、棧橋に戻って来た。慶介と金ちゃんは、「太陽がいつぱい」のアランドロンさながらの心境で、心臓をどきどきさせながら、木下氏らと共に棧橋に駆けつける。木下氏の補佐官は、手にメジャーを持って、ペンペン丸の長さを実測する気がみなぎっていることが、見て取れた。」

木下氏は、ペンペン丸の正体を見た瞬間、長年の感で、その小さなボートが3メートルに満たないことを察知したらしく、急に興味を無くした様に、踝を返して、棧橋から補佐官を引き連れて戻って来た。」

木下氏は、連れの補佐官になにやらつぶやいているのが聞こえる。

「よくもまあ、あんなに小さな船で、あそこまで行ったものだ。」木下氏は、今は、くれぐれも気をつけるように慶介に一言二言苦言を呈したかと思うと、マリナーの木村さんに「手間を取らせたな。」といって、さっさとライトバンに乗り込んで帰って行った。」

残された慶介と金ちゃんは、木村さんにボートを引いてくれたお礼をいうと、木村さんは、笑顔で、答えた。

「なに、大した手間じゃないよ。礼なんかいから、今度は、大きなクルーザーを買って、ここに預けてくれれば、それで十分さ。」

慶介は、マリナーからボートをマイカーに載せる帰りしなに金ちゃんに話しかける。

「海の男は、心が広くて、かっこいいよね。色々あった一日だけど、これに懲りずに今度こそ、大物のヒラメをしようとめようぜ。」

金ちゃんもスリリングな一日を振り返り、
「もう一度大物釣りの道具一式を買い直さなくっちゃね。今度からは、このゴム長ズボン、卒業するよ。」と満面の笑顔で答えてくれた。